

まえがき——今、何が起きているのか？

「先行き不透明」な時代と言われる。しかも、ITを通じて、個人の内面から地球の裏側まで、かつてないほど透明になったが故に、却ってそう感じられる奇妙な時代である。

たかだか十数年を過ごしてみただけで、二一世紀が二〇世紀とはまるで違った時代になることはよくわかったが、それにしてもこの世界は、一体、どこに向かおうとしているのか？

テクノロジーの変化一つ取ってみても、その目まぐるしいスピードは、一個人としての生活のほんの近い未来の姿さえ、曖昧なものにしている。

十年後、私たちはどんなメディアで本を読み、音楽を聴いているのだろうか？ そんな問いは、一九九〇年代でさえ愚問であり、せいぜいのところSF的だった。紙に決まっているし、まだまだCDだろうと、大半は考えていた。ところが、今同じ問いに、確信を以て答えられる人はいない。

十年経って振り返ってみれば、なるほど、どんな時代にも変化はある。しかし、今日の特異性は、その程度の甚だしきであり、過去との懸隔であり、渦中にある人間の意識である。

科学技術は、極度に細分化・専門化し、その奥行きは門外漢にはますます測り難くなってい

る。グローバル化によって皮肉にも国家の弱体化が顕著となり、資本主義の終焉が説かれ、成長神話は崩壊し、政治も経済も行き当たりばったりである。少子高齢化という未知の事態は、労働力の問題だけでなく、文化そのもののあり方を変えようとしている。他方で、自然という巨大な不確定要因の存在を、私たちは震災を通じて改めて痛感させられることとなった。

問題の本質は、世界の一個性だろう。内的に、世界は絶えず複雑にリンクの組み替えを行っているが、その一端が壊れた時は、どこで何が起きるのか？ まったく新しい知の出現は、何を終わらせ、何を生み出すのか？ 今ここにある停滞は、どこで踏みこたえられて乗り越えられてゆくのか？ 私たちは、どこに生きるための場所を求めたら良いのか？

「生命力の移動 *Déplacement de la vitalité*」という言葉は、一八五五年に、パリで初めて万国博覧会が開催された際、ボードレールが用いたものである。

ボードレールは、一般には『悪の華』や『パリの憂鬱』の詩人として有名だが、実は「現代」という時代について非常に先鋭的な思考をした批評家でもあった。

彼は、ドラクロワ、ワーグナー、ポーという、当時の美術、音楽、文学の最も現代的な表現者を、いち早く熱烈に擁護した人だったが、その拠つて立つところは、この万博の美術セクションを論じた批評にも見えている、「多様性」を「生の必須の条件」として尊重する思想だった。

興味深いことに、彼はその「現代性」を「進歩」とは呼ばない。むしろ啓蒙主義以来のこの「進歩」という観念については、「現代のうぬぼれの腐った土壌の上に花開いたこのグロテスクな

理念」として徹底的に批判し、「地獄を恐れるかのように警戒している」(！)と語る。彼の説くところはこうである。

「もしある国民が、前世紀において理解されたよりもっと繊細に精神的問題を今日理解するとすれば、そこには進歩がある。これは明々白々である。一人の芸術家が、去年よりも多くの知識なり想像の力なりを示したとすれば、彼が進歩したということは確実だ。もし、商品が、昨日よりも良質で安価に今日なつたとすれば、これも、物質界における疑うべからざる進歩である。だがしかし、明日への進歩の保証がどこにあるのか？」

彼はまず、「進歩」というのは事後的に、結果的に確認されるものであって、それが単線的に未来永劫続くという根拠はどこにもない、と言う。何事に於いても、「今日の繁栄は、悲しむべきことには、全く短いひとときを保証しているにすぎない。」というのが彼の諸行無常である。

それにも拘らず、この世界が存続しているのは、「多様性」に於いて、その「生命力」が常に「移動」しているからだ、というのが彼の認識である。芸術の生命力は、一時、新古典主義に居場所を定めたかと思えば、やがてロマン主義へと移動する。一つの領域、ある国が栄えたかと思えば、やがて衰退し、また別の領域、国が勃興する。この時、「この新来者が、古い者たちからすべてを継承するか、すっかり出来合いの理論を受けとるか、決して信じてはならない。しばしば(中世におけるように)、すべてが失われ、すべてが作り直されねばならぬ場合も起るのである。」つまり、消えたかと思われた生命力は、ひょっこりと、思いもかけない場所に姿を現す。「移動」は「移動」であり、決して未来の約束ではなく、単なる迷走かもしれない。しかもそれは、分散的であり、実のところ各領域の内的な関係性にこそ生命力は宿っているのかもしれない

ない。だからこそ、「多様性」が「生の必須の条件」だと言っているのである。

今日、私たちが日常的に経験している事態は、まさにこれである。

冒頭で触れたように、出版業界の生命力は、どのタイミングで紙から電子へと移りゆくのか？ あるいは、結局、それは両者に跨またがったまま、かなり長い間バランスを保っていくのか？ エネルギー問題に関して、社会はどこにその生命力を移動させるべきか？ 報道の生命力が、テレビや新聞からネットにすっかり移動してしまうという予言は、結局は、早まった臆断だったのか？ 世界経済の生命力は、BRICSに移動したはずじゃなかったのか？……

私たちは今日、混迷の時代にあつて、あらゆる領域の「生命力の行方」を注視している。

本書は、二〇〇六年から二〇一四年初頭にかけての八年間に、私が雑誌や新聞に書いてきたエッセイや対談を纏まとめたものである。最初から、こうした明確なコンセプトに基づいて書き継いできたわけではないが、一纏めにされたゲラを見直していて、自分のやっていたことは結局、そういうことだったのだと感じた。私はとにかく、目を凝こらして、今一体、この世界で何が起きているのかを具体的に考えようとしていた。

取り上げられている話題は、私自身が熱愛し、是非ぜひとも書きたいと思ったものから、書かなければならないと思ったもの、あるいは人が夢中になっているもの、人が私にどうしても書かせたいと思ったもの、何だかよくわからないもの、……と様々である。私は無論、文学について書き、私の唱える分人主義ぶんじんぎについて書いた。しかし、それだけではなく、アートやエンタテインメ

ント、更には時事問題について書いた。必ずしも堅苦しい内容ではなく、多くは好奇心の赴くままに、考えること自体を楽しんだ。

現代という時代の生命力の在り処は、果たしてどこだろうか？　そして、私たちの内なる多様に於いて、生命力はどこで活発であろうとしているのか？